

「天下一人を以て興る」 元早稲田大学総長 西原春夫

早稲田精神昂揚会の設立六十周年を心からお祝い申し上げます。おめでとう！

いまわが国は内憂外患の危機に直面しています。このような国難を前に、今ほど早稲田精神が求められている時代はないとの感を日増しに強めております。私は卒寿を過ぎた身ですが、「自分自身の早稲田精神を一層昂揚させねばならない！」と日々覚悟を新たにしているところです。

それでは、早稲田精神とは何なのか。曰く在野精神、曰く批判精神、曰く進取の精神、曰く、学問の独立……その内実を指し示す言葉は多々ありますが、私はこう確信しております。「早稲田精神とは『庶民精神』である！」と。

本来、国と民は一心同体であるべきものです。しかし国と民が対立する場合があります。その時、早稲田の人間は必ず民の側につく。民の立場でものを考え、民の想いを代弁する。このような早稲田精神は庶民精神と呼ぶべきものではないでしょうか。

早稲田大学に学んだ杉原千畝は第二次世界大戦の折、外務省の訓令に反してナチスドイツの迫害から逃れてきたユダヤ人たちに大量のビザを発給し、約 6000 人の命を救いました。早稲田大学のキャンパス内にはその功績を称えるレリーフが設置されていますが、そこには「外交官としてではなく人間として当然の正しい決断をした」という杉原の言葉が刻まれています。杉原は外交官として国の側につくので

はなく、人間として民の側についたのです。私はここに早稲田精神の神髄を見ます。

それでは、このような庶民精神はどこから来たのか。早稲田大学は明治十五年、東京専門学校として創立されましたが、当時すでに東京大学と慶應義塾が存在していたことを忘れてはなりません。東大は国家を上から率いる人材を養成して官僚を輩出しており、慶應は西洋合理主義を体現する人材を育成して経済人を輩出していました。その中で、明治十四年の政変で下野した大隈重信はいかなる大学を作ろうとしたのか、そこでいかなる人間を育てようとしたのか。

大隈重信は自由主義・民主主義の理想に燃えた人物であります。佐賀藩出身の大隈は、若き日に長崎でオランダ系アメリカ人のG・フルベッキに師事してアメリカの自由民主の気風に触れていたのです。しかし大隈が目指したのは単なる西洋の模倣ではない。大隈はこう述べています。

「我国は既に東洋の文明を代表すべき位地に達し、更に西洋の文明を東洋に紹介するの天職を有する者なるが故に、東西両洋の文明を融和綜合して、一層世界の文明を向上せしむることは、一に其使命なることを自信せざるべからず」

大隈は我が国が「東洋文明の代表」として自由主義・民主主義を実現すること、それによって「東西両洋の文明を融和総合」することを目指したのです。この態度は「脱亜大欧」を唱えた福沢諭吉とは正反対であると言えます。

大隈は一貫して日本国内における自由主義・民主主義の実現、東西両文明の融和総合という使命を追求しました。当初、大隈はその理想を政治の場で実現しようとしませんが、その試みは明治十四年の政変で挫折します。それでも大隈は理想を捨てず、新たに教育・学問の場で実現しようとしたのです。東大は帝国主義を担う官僚を育て、慶応は西洋合理主義を担う経済人を育てるが、それに対して早稲田は東洋文明に立脚して自由主義・民主主義を担う人間を育てる！これが早稲田建学の理念であり、早稲田精神すなわち庶民精神の起源だったのです。

その後早稲田大学には地方有力者の子弟が続々と集まりました。早稲田の学生たちは東京で学問を学んだ後、再びそれぞれの地方に帰っていきました。そして庶民の真っただ中に身を置いて、自由民主の理想を説いたのです。早稲田に学んだ人間は庶民の中にありながら庶民を導く者である。国のリーダーではなく民のリーダーである。早稲田大学が多くの政治家や言論人を輩出しているのは、この精神によるのです。

重要なのは、大隈が掲げた理想を学生たちが血肉化していったことです。早稲田精神はそこに宿

ったのです。早稲田精神に憲法はない。そこには行動あるのみである！・早稲田精神は頭で覚えるものではない。それは身体に叩き込むものである！早稲田精神は額縁のない絵のようなものであり、学生たちの血と汗と涙で描き足していくものなのです。

昭和十七年十一月十日、時の東条英機内閣と対立する中野正剛は大隈講堂で大演説を行い、満員の早稲田学生に向かってこう訴えました。

「諸君は、由緒あり、歴史ある早稲田の大学生である。便乗はよしなさい。歴史の動向と取り組みなさい。天下一人を以て興る！諸君みな一人を以て興ろうではないか。日本は革新せられなければならぬ」

この時、聴衆に紛れ込んだ政府の密偵は「弁士中止！・」と叫んで演説を止めさせるタイミングを窺っていましたが、講堂を埋め尽くして中野の一言一句に耳を傾ける学生たちの熱気に圧されて、ついに何の手出しもできませんでした。中野正剛の想いに応えた学生の熱気、これぞ早稲田精神です。名著『人間中野正剛』の著書である緒方竹虎もまた早稲田で学んだ人間であります。

中野正剛の問いは現代の私たちにも向けられています。「由緒あり、歴史ある早稲田に学んだお前たちはいま、いかに歴史の動向に取り組むのか！いかに早稲田精神を発揮するのか！」と。

私の答えはすでに決まっております。先の戦争を直接知る最後の世代として、人生最後の想いを込めて、東アジアを戦争のない地域とする。平和を阻害する恐れのある紛争が生じた場合には、周辺諸国等が間に立ち、アジア人としての叡智を傾けて解決を図る。国連憲章及び東南アジア友好協力条約の精神を再確認して推進するという、東アジア構成国の国家意思表示を求める運動を起こす。そのために、アジアで戦争を知る最後の世代を結集させる。

確かに国と国の関係には様々な問題があります。しかしそれに左右されない民と民の関係はありえるのです。「アジアの平和」を願う民の想いに国籍・国境はありません。このような共通分母を掲げてアジアの民をまとめる、そのために戦争を直接知るアジアの長老たちをまとめる。それが私の早稲田精神です。

この「アジア平和構想」は突如として閃いたものです。忘れもしない今年五月十六日朝の出来事でした。私は早速日本国内の同志を募り、福田康夫・元内閣総理大臣や岡本厚・岩波書店代表取締役社長をはじめとする多くの方々の賛同を得ることができました。福田氏も岡本氏も早稲田出身です。「この構想はアジア全体で平等に取り組むべきものだ。日本の提案に他国が乗るという形にしたり、日本がイニシアチブをとったりするべきではない」という福田氏の見解を踏まえ、この構想はアジア全体で同時進行すること、その第一歩として日本と韓国で同時に着手することに決めました。

九月には岡本氏から韓国の長老の一人である池明観氏に打診し、その賛同を得ました。池氏は大正十四年生まれで、韓国の民主化運動に関わってきたクリスチャンの宗教学者です。また岩波書店の雑誌『世界』で、一九七〇～八〇年代に「T・K生」というペンネームで「韓国からの通信」という連載をしていた人物でもあります。岡本氏は早稲田の学生時代から同連載を愛読しており、その後『世界』の編集長を務めた縁で二人は長年の知り合いだったのです。

池氏の呼びかけに応じて、韓国側でも鈴々たるメンバーが集まりました。私は彼らの招待を受け、本稿執筆（十月十九日2019年）の翌

日に訪韓することになっております。その際、私は「西原は日本人として韓国に来たのではない。平和を願うアジア人として、アジアの同志と力を合わせるために来たのだ」と訴えたいと思っております。

ここで強調したいのは、このような役割は早稲田大学の人間でなければ果たせないということです。先にも述べた通り、早稲田は建学以来東洋文明の一員であるという自信を持ち、アジアのために努力を重ねてきました。たとえば私は早稲田大学の総長時代にソウルの高麗大学と姉妹校の提携を結びましたが、当時高麗大学の理事長を務めていた金相万氏は「韓国にとって早稲田大学は特別な存在です。韓国の民族独立運動の指導者たちを生み出したのは早稲田なのです」と話していました。

実は、金相万氏の父親である金性洙は早稲田の卒業生だったのです。金性洙は高麗大学、『東亞

日報』、韓国民主党の設立者であり、大韓民国第二代副大統領をも務めた人物です。金相万氏は「父は日本の帝国主義は憎んでいたが、早稲田は心から愛していた」と語っていました。韓国を代表する政治家、言論人、教育者である金性洙には早稲田精神が流れていたのです。

このようにアジアとの縁が深い早稲田大学の人間が関わったからこそ、日韓関係が「戦後最悪」と言われる状況にもかかわらず、わずか1か月で日韓の間で「アジア平和構想」を合意させることができたのだと思います。しかしそれだけではない。これは天の采配なのです。

そうでなければ、この状況は説明がつかない。確かにこの構想を閃いたのは私ですが、それは我が力にあらず、天の采配だったのだと確信しております。私の耳には「西原よ、あと数年の健康は保証するからアジアのために一生懸命働きなさい」という天の声が聞こえます。天が卒寿を過ぎた老身にアジアのために働く最後の機会を与えて下さったのだと思うと感謝の念に堪えません。戦争を知る最後の世代として、また人生の大半をアジアに捧げた早稲田の人間として、「アジア平和構想」を人生